



Veritas No.41 (2009.7.22)

目次 (敬称略)

<歴史叙述の現在について—特集「夏休みに読んでほしい、読みたいこの一冊」に寄せて >
真栄平 房昭 (図書館長)

<特集 夏休みに読んでほしい、読みたいこの一冊>

- 石川 康宏 (総合文化学科)
北川 将之 (総合文化学科)
佐々 由佳里 (音楽学科)
石谷 真一 (心理・行動科学科)
高岡 素子 (環境・バイオサイエンス学科)
井出 敦子 (院長室職員)
蔡 宛達 (文学研究科院生)
近藤 道子 (文学研究科研究生)
明路 節子 (本学同窓生)

<本の花束>

永久保 晴子

<研究室から>

田中 真一

<史料室から>

佐伯 裕加恵

<神戸女学院大学図書館架蔵フランス語書目雑談 Ⅲ>

—V・ユゴー『クロムウェル』初版本（1828年）について—（その3）

柏木 隆雄

<視聴覚センターからのお知らせ及び近況報告>

川野 福恵

無断転載を禁ず

＜ 歴史叙述の現在について

－ 特集「夏休みに読んでほしい、読みたいこの一冊」に寄せて－

真栄平 房昭 図書館長 総合文化学科教授

「歴史」は、いったい誰のために書かれるのでしょうか？ 若い世代の皆さんは、それぞれに歩んできた歴史（過去）をふりかえり、さらに未来の夢について自問自答しながら、これから長い人生を歩き続けていくことでしょうか。 思いもよらない困難な状況にぶつかったとき、それを精神的に乗り越えていく不思議な力が、1冊の本との「出会い」によって与えられることもあります。そこで、未知の本の扉を開き、楽しい夏休みの読書体験を自分なりに深めてほしい、と願っています。

ここでは、グローバル化する現代社会で主体的に生きるために必要な「歴史的思考力」の養成という観点から、森明子編『歴史叙述の現在：歴史学と人類学の対話』（人文書院、2002年）をとりあげ、論旨の一部を紹介したいと思います。本書は国立民族学博物館で行われたシンポジウムをもとにしており、13名の歴史学者と人類学者が、それぞれの専門を越えて「対話」をめざし、歴史叙述の可能性と問題点について議論しています。

具体的には、現代の歴史叙述で問題になる四つのテーマをとりあげています。①「歴史叙述の技法」、②「史実のなかのフィクション、フィクションのなかの史実」、③「ナショナル・ヒストリーの生成」、④「歴史叙述の主体と客体」というものですが、それぞれに、「言語論的転回」以降の歴史叙述について考察しています。言語論的転回とは、広義には20世紀の思想界において、言語にたいする関心が高まり、「言語を中心に文化を再考する」動きがあらわれたことを意味します。文学理論を震源とするこの動きは、歴史学や人類学にも少なからぬ影響を及ぼし、記述の対象としての「歴史」や「文化」をめぐる概念の再検討を迫ることになったのです。

そのような状況のなかで、「文化の言説構造」がさまざまな視点から議論されています。「文化・歴史・権力」という三つのトライアングルをめぐって人類学、社会学、歴史学をはじめとする人文諸科学の問題関心やアプローチのあり方が提示され、興味深い問題が指摘されています。たとえば、先にも述べた「言語論的転回」という大きなうねりが世界的に進行した1980年代以降、日本の人類学者たちも、歴史を人類学の扱う対象として明確に意識するようになりました。そこで、歴史を記録する文字以外の媒体として、儀礼として伝達される歴史、あるいは空間に刻まれる記憶、モニュメントとしての歴史が注目されたのです（本書 19-22頁）。

また、近現代史研究者の成田龍一氏は、「国民」の歴史学をめぐる興味深い議論を展開しています。たとえば、1930年代後半から40年代にかけて、天皇中心のいわゆる「皇国史観」とともに、「上からの歴史像」（国史＝ナショナル・ヒストリー）として、文部省教育局編纂の『国史概説』（1943年）などが登場し、「政府が歴史認識に介入する」ようになりました。こうした政府による「上からの歴史像」の提供というナショナルな「歴史の制定」の仕方に対抗して、実証主義を根拠とするいまひとつの「国民」の歴史学（ナショナル・ヒストリー）があります。それは総力戦を遂行する戦時体制に対応する歴史学への対抗となりました。しかし、その対抗・批判的歴史学でさえ、「国民」を根拠とするナショナル・ヒストリーとして提供されたのです。そのことは、「戦後歴史学」の歴史的位相を考える際に見逃せない、と成田氏は指摘しています（190頁）。

私たちが生きている「現実」社会も、もちろん時の流れとともに、やがては「歴史」の一部となります。「歴史をいかにとらえるか」ということについても、人類学者のあいだに多様な考え方がある、と本書は指摘しています。言いかえると、歴史学者が記述の対象としてきた歴史とは異なる来歴をもった、人類学者の「歴史」への関心があるのです。

<特集 夏休みに読んでほしい、読みたいこの一冊>

石川 康宏 総合文化学科教授

★『理論劇画・マルクス資本論』門井文雄原作／紙屋高雪構成・解説／石川康宏協力 かもがわ出版 2009

マンガです。門井文雄原作／紙屋高雪構成・解説／石川康宏協力『理論劇画・マルクス資本論』（かもがわ出版、2009年）。ちょっと絵がクドイけど、でもマンガだから、すぐに読めますよ。発売1週間で1万部くらいは出ました（その後は、知りませんが）。

学生のみなさんは、カール・マルクスって、知ってるんでしょうかね？人の名前ですよ。聞いたことくらいはありますか？現代の私たちがくらす社会の全体を、はじめて「資本主義」という言葉で表現した人です。そして、資本主義の土台をつくる経済の基本が「労資関係」だということを、突っ込んで明らかにした人です。それから「市場経済」とは何かを、徹底的に探究した人でもありますし、人類史の変化の原動力が経済の変化にあるといったことを独特の歴史理論にまとめた人でもあります。

あわせて、マルクスは根っからの革命家でもありました。社会改革家です。1818年に生まれて1883年に亡くなりましたが、自分の目の前にあった「資本主義」の弊害に、はげしい憤りをぶつけて、特に、工場労働者たちの貧困——低賃金、過密、長時間労働、女性差別、児童労働——の解決にたいへんな執念を燃やした人です。いまでいう「労働基準法」の元祖となる工場法の充実に力をつくしました。そして、世界ではじめて共産党をつくり、労働者たちが主人公となる社会づくりをめざし、また『資本論』というとてつもなく長い本を書いた人です。

大きな本屋さんに行ってみて下さい。マルクスは、最近、ちょっとしたブームですよ。去年は、ワーキングプア問題への注目から、小林多喜二の『蟹工船』が大きな話題になりました。小林多喜二は、マルクスを懸命に読んで、戦前・戦中の日本で平和と植民地の解放、主権在民を求める民主主義の革命を追求した作家で、やはり革命家でした。残念なことに、29才の若さで、特高警察にとらえられて虐殺されてしまいました。

その『蟹工船』ブームのおしまいに、今度は、2008年10月からの世界同時不況が重なり、日本では「非正規切り」が一斉に行われ、年末年始の「年越し派遣村」が大きな社会問題になりました。そこから、社会に対する視線が「こんな労働のあり方でいいのか」というそれまでのものから、「いまの資本主義はどうなっている？」「そもそも資本主義というのは？」といった、社会の根本的な仕組みに向けられるものに広がってきました。今のマルクスへの注目は、そこから始まっていると思います。

『理論劇画・マルクス資本論』は、マルクスの主著『資本論』全3部（長い！）から、最初の第1部（1867年）を取り出し、さらにその主立った論点だけをマンガで表現したものです。その本題の前と後ろには、ちょっとしたマルクスの伝記もつけてあります。もちろん、それは140年も前の資本主義論ですから、古いところもたくさんあります。でも、案外たいせつなところについて、変わっていないなあとか、これはスルドイと思われられるところがあるのです。マルクスを、21世紀という社会と知恵の高みに立って、現代的に読むにはどうすればいいのか。そんなヒントになればと、おしまいには参考文献もあげてあります。

ひとつ手にとって見てください。きっと、おもしろいですよ。2時間で読めます。

北川 将之 総合文化学科専任講師

★Theory of Democracy Revisited. G. Sartori. Chatham House Pub. 1987

近代民主主義の源流を西欧思想に依拠しながら、その構成原理のシフトを丁寧に論じたものです。筆者のジョバンニ・サルトーリによると、民主主義体制が「多数決」と「少数派保護」の二つで構成されているとすれば、その手続き的側面である意思決定プロセスでは、「繰り返しゲーム」による相対的利得の互酬的關係が成立していなければなりません。世界各地でみられる民主主義体制をめぐる動揺と混乱を考える上で、示唆に富む一冊です。

★ Democratization. J. Grugel. Palgrave Macmillan. 2002. (邦訳『グローバル時代の民主化』J. グリュージェル著 法律文化社 2006)

東欧の民主化革命から今年で20年になりますが、「民主化」とは何かということに興味がある人にぜひお勧めしたいのがこの本です。実証主義アプローチをとる比較政治学の分野で蓄積されてきた「民主化」論の主要なものが、初学者にとってわかりやすく解説されています。

佐々 由佳里 音楽学科准教授

★『メンデルスゾーンの世界』 船木元著 文芸社 2008

今年は、フェリックス・メンデルスゾーン生誕200年の記念の年で、何かとメンデルスゾーンを演奏する機会が多い。春にピアノトリオ二短調を2回、6月の神戸女学院春季公開講座でも、ピアノトリオと「真夏の夜の夢」のメンデルスゾーンオリジナル連弾版から2曲を演奏する機会があった。

メンデルスゾーンのピアノトリオ二短調 Op.49 は、数あるピアノトリオ作品の中でも屈指の名曲である。美しいメロディーと、妖精のような軽やかさ、ハイテンションの高揚感……クライマックスでは思わず身震いしてしまうほど気持ちが高まっていく。しかしピアノパートは何と音符の数が多いことか！ 楽譜はアルペジオや細かいパッセージでまっ黒。ヴァイオリンとチェロが朗々と歌っている傍らで、ピアノは息せき切って跳ねまわっている。ちょっと不公平感も感じてしまう。メンデルスゾーンの時代の楽器は今の楽器と異なってもっと軽くて音色も繊細だった。現代のパワフルなフルコンサートピアノでその軽やかさ、繊細さを出すのは至難の業と言える。でも、華麗で煌めくようなピアノのパッセージと弦楽器の伸びやかなメロディが溶け合う絶妙な美しさには、そんな苦労も忘れてしまう。

船木元著の『メンデルスゾーンの世界』はメンデルスゾーン生誕 200 年を前に昨年末に出版された著書。大手機械・プラントメーカーに勤務していた著者の評伝的エッセイだが、メンデルスゾーンと言う天才作曲家の多彩な才能を色々な面から解説してくれる入門書のような一冊である。わずか 38 歳で駆け抜けたその凝縮された人生も足早にとたどる事ができる。今年はメンデルスゾーンの音楽に触れる機会が多いと思うので、もう少しメンデルスゾーンの事を知ってみたいという方には是非お勧めしたい。

石谷 真一 心理・行動科学科教授

★『夢見の拓くところ こころの境界領域での語らい』 オグデン著／大矢泰士訳 岩崎学術出版社 2008

元来、無精者で本は必要に迫られないと読まない。特に夏休みともなれば、本を閉じて海や山に出かけたい衝動に駆られる。結果、夏の終わりに毎度のごとく後悔が待っている。

私が専攻する心理臨床学、中でも精神分析をはじめとする心理力動を重んじる心理臨床実践においては、人と人とが密接な情緒交流を起こすことで心の変化を狙っている。従って、その訓練においても、書物に向かうばかりでなく、人との情緒的關係で鍛えられることを強調する。理論や技法が人を変えるのではない。他者との情緒交流の経験が人を変えるのである。では情緒交流がなぜそれほどまでに重要なのか。トーマス・オグデンという精神分析家は、患者の心に生命を蘇らせるような情緒交流を探求している、と私には思える。人生の半ばに達し、私自身、心身に死と衰えを予感するようになったこともこの手の論考に惹かれる所以かもしれない。一般の方には読みづらいかもしれないが、『夢見の拓くところ

ろ こころの境界領域での語らい』(オグデン著、大矢泰士訳 岩崎学術出版者)、およびオグデンの前著をこの夏じっくりと味わいたい。

高岡 素子 環境・バイオサイエンス学科准教授

★『もの食う人びと』 辺見庸著 角川文庫 1997

今から12年ほど前にこの本に出会いました。その頃の私は大学の研究所で働いており、読むのは最新の研究論文だけでした。そのような時、教授秘書だった方からこの本をぜひ読むように勧められました。著者は共同通信社の記者です。世界のあらゆる場所を訪ね、人々がどのようなものを食べているのかというミクロな部分を体験することから、世界のマクロの情勢を解き明かすというノンフィクションです。残飯が売り買いされている現状、飢えて死を待つ少女、放射線を浴びたキノコを食べ続ける老人など、日本では想像ができないほどの悲劇が報告されています。これほど衝撃を受けた本はありませんでした。食べるという行為を通し、地域紛争、エイズ、宗教、環境さらに人間とは何かについて考えさせられます。驚いたことに出版されてから10年以上経過した今でも、世界のどこかでこのような悲しい現実が存在しているという現状は変わっていません。怒りの味、憎しみの味、悲しみの味を感じることができます。

井出 敦子 院長室職員

「誰に英語を習ったの？」－神戸女学院的視点で読む白洲次郎氏(1902-1985)関連資料

今年の1月28日(水)から2月9日(月)まで、大丸神戸店にある大丸ミュージアムKOBЕで「白洲次郎と白洲正子展」が開催されていました。これは、ご夫妻の旧邸「武相荘」が記念館としてオープンして7年になるのを記念して全国4会場で開催された展覧会の最後を飾るものでした。(注1)

会場の記念品売場では、白洲次郎氏の祖父にあたる白洲退蔵氏に関する冊子も販売されていました。(注2)「女子教育を援助」というページには、神戸の山本通キャンパスの絵

と共に神戸女学院創設のことが書かれています。

神戸女学院は、1873年（明治6年）に来日した2人の米国人女性宣教師、タルカット女史とダッドレー女史によって、1875年（明治8年）、神戸の山本通に誕生し、1933年（昭和8年）、現在の西宮市岡田山に移転して、今年で創立134周年になるのですが、その創設に際しては、白洲退蔵氏をはじめ、旧三田藩、九鬼家の方たちからの多大な支援がありました。特に、退蔵氏には、私塾時代に北長狭通のお宅を教場として提供していただき、山本通に校舎を構えた後にも、隣接する持ち家を寄宿舎としてご寄贈いただくなど、草創期の学院の発展に大きなお力をいただいたのです。

そのことを、次郎氏は評論家の扇谷正造氏との対談の中で次のように語っています。

（注3）

ぼくのじいさんは白洲退蔵というんだ。これは所謂ナンというかな、明治初めのモダンボーイだナ・・・孔子様からキリスト教になったんだ。そしてその時分に神戸へ出てきたんだよ。藩は丹波の三田藩ですよ。神戸へ出てきて、ぼくの親父にアメリカ人の家庭教師を置いたんだ。ミス・トーカツという人をね・・・自分の家の一部に、うちの親父ばかりでなくって、近所の子供にも教えるように、昔でいえば塾を創った・・・英語寺子屋を始めたんだよ。神戸の山本通りというところですよ。家の一角で始めた、それが神戸女学院の始まりなの・・・神戸女学院という学校は、日本語では「神戸女学院」といってるが、英語では「コーベ・カレッジ」というんだ。女学院の「女」がないの。だってうちの親父が第一号の卒業生だもの。女学校で男の卒業生を持っている学校は、日本にはほかにないだろうね。

ミス・トーカツ、タルカット先生のことですね。残念ながら、次郎氏の父、白洲文平氏は私塾時代の生徒さんということで、卒業生ではないのですけれど。

その次郎氏を描いたドラマがNHKで放映された（最終回は2009年9月23日(水)に放映予定、それに先がけて前2回も再放送される）のをご覧になった方も多いのではないのでしょうか。（注4）ドラマにも描かれていた次郎氏の英語力、それはどこで習得されたものなのでしょう。

青柳恵介氏の著書（注5）に登場する次郎氏の幼馴染、牛場友彦氏の「祖父退蔵が神戸女学院の創設に関与し、その敷地を学校に提供したこともあって、神戸女学院の外国人教師が白洲家に寄宿しており、次郎はその外人教師から英語を習い」という回想、また、北康利氏の著書（注6）の「祖父・退蔵がミッション系の神戸女学院創立に関わったことから、

白洲家には外国人女性教師が寄宿しており、次郎は彼女たちからネイティブの英語を学ぶことができた。」という記述など、次郎氏の父にあたる白洲文平氏方に本学院の外国人教師が寄宿していて、次郎氏は彼女たちから英語を習ったと読み取れる記述が見受けられます。

実は、それはどの先生のことなのだろうという興味から、1900年から1920年あたり（次郎氏が生まれてから英国に留学するその前後）の本学院の外国人教員の所在を調べてみたのですが、その多くは学院内の宿舎に居住していて、学外居住者にも、白洲家にお世話になっていたと思われる方は、今のところ確認されていません。

また、ドラマにはミセス・ワイルドという家庭教師が登場していましたので、何か資料をお持ちなのかもしれないとNHKに問い合わせてみましたところ、お名前を含めてフィクションですとのことでした。

一方、次郎氏の長女である牧山桂子氏の著書（注7）には「父にそのことを聞いてもはっきりとは答えてくれず、後年不思議に思って叔母に聞きますと、ハイカラだった彼等の家庭では、子供たちを神戸の日曜学校に行かせていて、教会の牧師様に英語を教わっていたということでした。」と書かれています。

もしこの「神戸の日曜学校」が退蔵氏とも神戸女学院とも縁の深い「神戸教会」（神戸市中央区花隈町）の日曜学校であれば、本学院の教員たちの多くは当時日曜日には神戸教会の主日礼拝に出席していましたから、「牧師様」とはあるけれど話がつながるのではないかと考えました。そこで、牧山桂子氏に何かほかにお聞きになっていることがないかお尋ねしてみましたが、ご存じないとのことでした。今度は、神戸教会の年史や月報を調べてみましたが、英語の聖書を読む会はあったようですが、教会として英語教室を開催していたというような記録は見つかりませんでした。また、次郎氏につながるような記述も見つけることはできませんでした。

以下はあくまでも個人的な推論です。

教員が下宿あるいは間借りをしている場合、普通「寄宿」とは言わないように思うのです。このことから、「白洲家に寄宿」というのは、白洲家が寄宿舍を寄贈という話が混入しているのかもしれないと考えました。そして、多分、神戸教会にいらしていた神戸女学院の宣教師の先生たちの誰かが、個人的に、次郎さんたちに英語の手ほどきをしたのではないのでしょうか。この写真の中の誰かだったら素敵なのですが、タイムマシンがあったら、本当にそう思ったことでした。



神戸女学院図書館蔵

- (1) 『白洲次郎と白洲正子 乱世に生きた二人』(2008)はその図録です。
- (2) 『白洲退蔵』(2001) (さんだ人物誌；3)
- (3) 『白洲次郎 日本で一番カッコイイ男 生後100年 総特集』(2002) (文藝;別冊) (KAWADE 夢ムック) に収録されている「ハイカラ三代目」より (初出は『小説公園』57.5号)
- (4) 『NHK ドラマスペシャル 白洲次郎 UNKNOWN YEARS』(2009)にはイギリスで撮影された写真やドラマのイメージボードが収録されている。
- (5) 『風の男 白洲次郎』(1997)
- (6) 『白洲次郎 占領を背負った男』(2005)
- (7) 『次郎と正子～娘が語る素顔の白洲家』(2007)

以上は、図書館に学院関係資料として受け入れていただく予定です。

蔡 宛達 文学研究科院生

★『日本語が亡びるとき—英語の世紀の中で』 水村美苗著 筑摩書房 2008

台湾から来日して、すでに15年以上の月日がたちました。来日後、始めの約三年の間は真剣に日本語を勉強し、日本語は瞬く間に上達しました。

母語の台湾語以外に、中国語と日本語がある程度使えるわたしの悩みは、この三つの言葉をどれも優美に操れないということです。

生まれた土地—台湾を長い間離れ、その間、日本語のシャワーを浴びてきたせいなのか、いつしかわたしは「母語」—母の言葉に隔たりを感じ、母の言葉を少しずつ失っている自分の中の言語状況に不安を覚えました。わたしの第二の言葉、「国語」—中国語も同じ状況です。第三の言葉—日本語、日本語と接する時間の方が長いので日本語の優れた操り手になりたい！という日本語への思いや憧れとはうらはらに実際、そのレベルまで到達するにはまだまだです。そんな自分の言語状況に対して、もう目を背けられなくなってきたときに出会ったこの本は、「日本語」、「母語」、「国語」の「文学」への繋がり的重要性について鋭い観察をしています。日本人ではないわたし自身の言語状況の問題意識と重なる部分があり、「日本語」について書かれている内容も共感できます。すべての日本人にお勧めしたい一冊です。

近藤 道子 文学研究科研究生

★『詩と反逆と死』 大宅歩著 文芸春秋 1971

本棚を物色していると黄色く色あせた一冊の本が目飛び込んできた。私が若かった頃、大阪文学学校というところに通っていたころ買ったものだ。入学式のとき、校長の小野十三郎が挨拶のなかで「この中で今の社会とか生き方に満足している人は？」と言ったことを今でも覚えているのは、その問いが私の青春の悩みそのものであったからだろう。そんな当時の自分自身のことも彷彿させるのが本書である。現在の私は、歩と同年代の息子を持つ年代になってしまったが、久々に再会したこの本を読んで、青春・悲しみ・死についてももう一度考えてみたいと思った。

著者大宅歩は、ジャーナリスト大宅壮一の一人息子である。父親の教育は遅しく育てほしいと願う雑草教育と称する放任主義的なものであったが、一方で歩は音楽と文学を愛

し常に父に反撥を感じていた。10代のときラグビー部の練習で頭を怪我し、その後遺症の発作に見舞われるようになってから歩はいつも死と直面し戦っていた。そして33歳の若さでこの世を去った。彼の死後に天井裏から出てきたつづらっぱいの文章から遺稿として本書をまとめた父壮一は、「彼は文章がうまかった。純粋なもの、一生に一度でいいから、残るようなものを書きたいと考えていた。」と述べている。本書には、そんな歩の青春が鮮烈にほとばしっていると思う。

これから自分の道を考える若者たちにぜひおすすめしたい作品である。

明路 節子 本学同窓生

★『洋行の時代 岩倉使節団から横光利一まで』 大久保喬樹著 中公新書 2008

「昔、欧米に渡ることを『洋行』と呼んでいた時代があった」という文章で始まる本書は、幕末から一世紀近くにわたる「洋行」の変遷が時代を追って簡潔にまとめられている。明治の日本を背負った政治家や知識人、エリートの代表格の森鷗外、夏目漱石、そして親の援助で洋行した永井荷風や有島武郎などの私費留学生、洋行というより「外遊」「漫遊」をした人々まで実にさまざまな「洋行者」が紹介されている。

私にとって洋行者はエリート官僚や選ばれた学者又は経済的に余裕のある恵まれた人々のイメージがあるが、本書では曲芸師や川上音二郎、貞奴、芸者花子を「芸を売り込むことによって日本文化を輸出し、日本の旗印を欧米の地に記した」と評価している。興味深いエピソードの数々から芸人たちのたくましさや底力が浮かび上がってくる。

そして「洋行」という視点でとらえられた日本人の織り成すドラマに読者は引きずり込まれていく。

私は本書第一章で取り上げられている久米邦武の編著による『米欧回覧実記』の読書会に参加しているが、久米の文章の重厚さに、鋭い観察と考察の叙述に感服しつつ、現在の欧米と比較しながら使節団の旅を追体験して楽しんでいる。

『洋行の時代』を読むことによって読書の幅を広げていただきたいと思う。

<本の花束 >

永久保晴子 図書館職員

図書館新館の前に広がるシェークスピアガーデンをはじめ、四季折々に私達の目を楽しませてくれる花々は、岡田山全体が一つの美しい花束のようです。また読書にじっくりと取り組める学生時代は、人生の中で、大きな本の花束をプレゼントされたような貴重な時間だと思います。

新しいコーナー「本の花束」では、岡田山の花々や、本にまつわるお話を交代で綴っていきます。

植物と図書館の意外な関係！？

さりげなく咲いている岡田山の小さな花も、日常よく見かけるお花屋さんの花も、分類がなされており、それを調べてみると、意外なルーツがわかることがあります。

「分類 (classification) は、知のはじまり」といわれるそうですが、膨大な事象の全体を、把握する為のものであり、図書館の本も、森羅万象のテーマがどこかに収まるように分類されています。

変わり種！？KobeCollegeLibrary の分類法

日本十進分類表 (NDC) という言葉をどこかで聞いたことがあるかもしれません。日本の図書館で、一般的に使われている分類法です。

K.C.L.では、デューイ十進分類法 (DDC) を採用しており、日本ではちょっと変わり種ですが、こちらの方が、現在使われている十進分類法の元祖といえます。ちなみに、デューイ十進分類法を採用しているところは大学図書館全体の7%だそうです。(1981年調査)

この分類法を考案した、メルヴィル・デューイ (1851-1931) は、母校のアマースト大学図書館で働きながら、わかりやすい図書の整理法について思いを巡らせていました。そんな中、1872年の暮れの、ある日曜日、教会で牧師のお説教を聞いている時に、突然十進のアラビア数字を使って、全ての知識に番号をふる方法を思いついたそうです。まさしく神の啓示だったのでしょうか？それは定かではありませんが…。

分類からのアプローチ

図書館で、本を探す時、パソコンで検索して、書架へ一直線という場合が多いと思います。しかし、パソコンで検索できるデータによって本の内容の全てが調べられるわけでは

ありません。是非、分類からのアプローチも忘れずに！

請求記号の1段目の分類番号は、例えば芸術なら700、その中でも絵画は750、絵画の主題別が754、さらにその中で宗教画になると754.1というように、向かって左から右へと内容が絞り込まれるように、区分されています。

分類表を持って歩いてみよう！

海外の知らない街に行った時に、まず小高い丘に登って、街全体を俯瞰して見ることにしているという旅人の話を読んだことがあります。図書館の分類表とは、街を見渡す地図のようなもの。

この夏休みには、涼しい図書館で、見知らぬ街を尋ね、道ばたの花を愛でるような気持ちで、図書館内を歩いて、書架の本を眺めてみてはどうでしょう。（この事を図書館用語では、ブラウジングと呼びます。）全体を見渡ししながら、視野を広くして見ていると、思いがけない発見があるかもしれません。

参考文献

吉田政幸 『分類学からの出発』、東京：中公新書、1993年

緑川信之 『本を分類する』、東京：勁草書房、1997年

高田高史 『図書館が教えてくれた発想法』、東京：柏書房、2007年

川崎良孝編集 『大学生と「情報の活用」：情報探索入門』、京都：（社）日本図書館協会、2004年



<研究室から>

田中 真一 総合文化学科准教授

私は言語学（日本語学）を専門としているが、この分野についてよくされる誤解に「言語学者は多くの言語を話せる人」、「日本語学者は正しい日本語を話したり書いたりする人」というのがある。たしかにこういった資質のあるに越したことはないが、必ずしもそれらは正しくない。言語学（日本語学）はごく簡単に言えば、言語の法則性を探る学問である。

たとえば次の文や単語の共通項は何か考えていただきたい。

(1) 正子は、父に來られた。／太郎は、雨に降られた。

(2) サツ、ヤク、ぱしり、ぶくろ、...

(3) だま、ざま、ずる、ぐる、でぶ、...

日本語話者ならすぐに「マイナスの意味」と答えることと思う。ここで立ち止まって、また二つほど考えてほしい。1. (1)～(3) 各々の中で、何がマイナスの意味を生じさせているのだろうか。2. 個々の理由を統括する原理はあるのか。——答えはともにイエスである。

(1)～(3) に共通するのは、「通常から逸脱した作り方」がされていることだ。(1) は受け身文で、それは通常「マイケルはダイアナをほめた」から「ダイアナはマイケルにほめられた」が出来るように、普通の文（能動文）をもとに直接変換される。ところが不思議なことに、(1) には対応する能動文がない（*「父は（??正子に）來た」のように、きちんと対応しない）。

(2) は省略語で、そのされ方が通常と違う。普通は「テレビ（ジョン）」、「チョコ（シート）」のように前半が残る（これは多くの言語に共通する方法である）のに対し(2) は後半が残っている。

また、(3) は和語（大和言葉）であるにもかかわらず、濁音で始まっている。和語は普通、濁音に相当する子音では始まらないという性質を持つ（これも多くの言語に共通する）。どれも、敢えて普通と違う作り方をすることで、特別な意味（マイナスの意味）を加えようとしているわけである。

このように、言語研究には、いくつものレベルで「発見」に満ちている。現象の存在自体に気づくこと然り、その要因を探ること然り、一見無関係に見える要因間の共通原理を探ること然り、無関係の言語の間に共通性を見つけ出すこと然りである。言語学者はこのような、言葉の背後にある法則を発見することを仕事としている。それらのうち、どれかのレベルで発見をしたときには、嬉しくて本当に眠れなくなる。こういった作業を通して、時間や空間が離れた、他の研究者の発見と結びつきができることにも喜びがある。

言語学者は、常にこういったことを考えて生活しているので、いわゆる職業病もある。それは日常会話にも分析を加えてしまうことである。相手と真剣に会話しながら「今この人、憤りながら『ジブンデタイタマメダ』（自分で炊いた豆だ）って言い間違えたけど、『ジブンデマイタタネダ』（自分で蒔いた種だ）の語頭の/m/と/t/を入れ替えたんだ、」などのように、別のことを考えたりする（言い忘れたが、言語学者は変人が多いという「誤解」もある）。

このような分野を専門として過ごすゼミ生のほとんどは、日が経つにつれ少しずつ、「今、この人・・・って言ったけど・・・」のように考え始め、それを正直に告白し、皆で笑い合ったり、真剣に話し込んだりすることになる。そういった瞬間に接した時も、言語学者は嬉しくて眠れなくなる。

<史料室から>

佐伯 裕加恵 史料室職員

神戸女学院の演劇

神戸女学院生は演劇好き一。学内では文芸会、音楽会、バザーがあったり、創立記念に歌を作って歌ったりと、神戸女学院の学生・生徒たちは昔からいろいろな行事に積極的に参加しています。学生劇も盛んに行なわれていたようです。特に創立者記念日（昔は創立記念日とっていました）に行なわれていたものは「愛校劇」とまとめていってもいいと思うのですが、学校のことを紹介する内容の創作劇です。現在残っているプログラムを見てみると、大正から昭和初期の劇には、創立者タルカット先生（Miss Eliza Talcott）、5代目院長デフォレスト先生（Miss Charlotte Burgis DeForest）を主人公にした物語があり、なかなか凝った作りのようです。今回はその中から1917年9月に発行された同窓会誌（現・広報誌）『めぐみ』第64号に掲載された「タルカット氏の一代」という劇を紹介してみたいと思います。

この劇は1917年の創立者記念日（5月22日）に行なわれた記念文学会での出し物の

一つです。2部構成（第1部5幕、第2部6幕）で、タイトルが示すようにタルカット先生の生涯を描いていて、物語の合間に卒業生の手になるエピソードが朗読という形で挟み込まれています。現代では、創立者記念日の講演でタルカット先生の話を知ることができる機会がありますが、それを物語仕立てで見せたもの、というところでしょうか。出演者は皆学生（名前の出ている人が34人、それ以外で一学年全てが出ている学年もあります）で、配役は幕ごとに異なっています。記録には各幕の登場人物とあらすじしか残っていませんが、それだけでも充分、タルカット先生がどういう方だったのかがわかります。

物語はアメリカでの家庭生活から始まります（第1部）。敬虔なクリスチャンホームで育ったタルカット先生は子供の頃から伝道に興味を持つようになります。優秀な成績で学校を卒業、教師を経て、病気の伯母さんの看護に当たります。その後、伝道への道を志すこととなります。海外伝道に従事することになったきっかけや、伝道会本部でのやりとり（台本が残っていればもっとよくわかったのですが）から当時の様子を伺い知ることができます。第2部の日本時代には、タルカット先生のさまざまなエピソードが織り込まれています。先生の言動を通して、人柄、クリスチャンとしての生き方がわかるようになっていきます。

エピソードのタイトル「嘘おっしゃい」は、おそらく先生が事の真偽を質したときにいわれた言葉なのでしょう。「月曜日までの帰宅願」では、帰宅願を出した生徒に対して「上級生たるものは如何に日曜日を守るべきかに就き責任を喚起し自ら判断せしむる所ありたり」とあらすじがついています。伝道の場面では、新任の宣教師がタルカット先生について伝道活動に行きたいと言ったとき、「日本礼法の要点を学ばば随伴を許さん」といったとか。日本の習慣を理解し、大切にしていたということがわかります。日本に派遣される宣教師への忠告「徒に日本人を批評すべからざる事を以てし、常に其の批評を試みんとする場合には常に其の批評の親切なりや真実なりやまた必要なりやの三重の反省の後になすべき」からは、先生の他人に対する接し方の心構えが伝わってきます。

実際の宣教師の話や手紙を参考に作られたこの劇の作者は、ソール先生でしょうか、それともデフォレスト先生でしょうか。いずれにしても、タルカット先生への理解と尊敬、愛情が感じられます。また、参加する者、見る者にとっても臨場感のある、いわゆる偉人話ではなく、学校の精神を知るよい機会となったことでしょう。

＜神戸女学院大学図書館架蔵フランス語書目雑談 Ⅲ

—V・ユゴー『クロムウェル』初版本（1828年）について—（その3）>

柏木 隆雄 元神戸女学院大学総合文化学科助教授、
現在大阪大学名誉教授・放送大学大阪学習センター所長

1. ロマン主義の星ヴィクトル・ユゴー

神戸女学院大学図書館架蔵の稀覯書についての雑談を、ヴィクトル・ユゴーの『クロムウェル』初版（1828年刊）を中心に昨年夏と冬に2回書かせていただいた。おおむねその版の重要性や稀覯の所以を説き及んで、「もともと所蔵書目の紹介という本文の本来の目的からすれば、『クロムウェル』の内容紹介や文学史的意義を詳しく論じるのは他日を期す」として、次回は別の書物に移ろうと思っていたところ、編集の馬場さんから私が扱ったヴィクトル・ユゴーの『クロムウェル』の戯曲自身について、その内容がどんなものなのかも知りたい、と要望があり、3回目となっては文字通り下手の長談義になるけれど、それではもう一度『クロムウェル』を取り上げて内容を紹介することにしましょう、と約束した。原稿の締め切りは今年の2月頃と言われたような気がするが、約束した仕事のほかに無闇と他の用事や原稿が殺到し、申し訳ないが、と一回分の延期を申し入れる羽目になってしまった。心には掛かりながら（こういう気の重さは経験無い人には測り知れぬ陰鬱なものがある）、相変わらず押し寄せる多事に紛れて、ひょっとして「ヴェリタス」の編集の方々もそこを察して見逃してくださったのでは、と半ば期待していたが、先ごろ新しく編集の任にあたられることになった阪上さんから、7月8日が締め切りです、とメールをいただいた。いささか「六日の菖蒲」のそしりを受けることになるけれど、前回のまとめのような形で、神戸女学院大学図書館架蔵の稀覯書の一つ、ヴィクトル・ユゴーの『クロムウェル』初版（1828年刊）の内容を紹介することにしよう。

第二回に記したように、この作品は初版本八つ折り判で序文64頁のほかに本文476頁。相当な分量だ。現代の普及版であるガルニエ・フラマリオン版（1968年刊、アニー・ユベルスフェルト編注）でも解説、注を除いて、本文だけで400頁以上。しかも活字は普通のペーパーバックのものよりも小さい。この劇作がどれほど膨大な文字を費やして書かれているかがわかるだろう。中でも巻頭を飾る「序文」64頁は、他の同種の劇に与えたものよりも遥かに長大で、それだけユゴーのこの劇作にかかる意気込みを示している。それもそのはず、この序文こそ弱冠24歳のヴィクトル・ユゴーが、当時劇界を牛耳っていた旧来の古典主義者に叩きつけた挑戦状であったからだ。そのことはありきたりのタイトルを示したかに見える初版本の扉が、CROMWELLの下に DRAME として、旧来の

悲劇でも喜劇でもないところを示してあるところにも表れていることはすでに第二回目の稿で述べた。

1818年、僅か16歳の時に『オード集』で天才少年詩人として国王からの褒賞も得て、20歳で幼馴染のアデル・フシェールと結婚して後は、詩も書き、小説も出版し、さらに「ミューズ・フランセーズ」で新しいロマンティックの文学運動のリーダーとして華やかに活躍しつつある彼が、真の意味で新興ロマン主義者たちの盟主となるためには、劇場で実際の観客の前で新しい文学思潮の勝利を宣言する必要がある。時の『グローブ』紙にも「フランスの青年は演劇の革命を望んでいる」（1825年10月1日）と書かれてあるとおり、劇芸術が当時の文壇の主流で、そこで観客の支持を得て成功するかどうか、ロマン主義の星ユゴーに劇作を求める声も多かったし、またユゴー自身も大いに野心を燃やしてもいたのである。彼が『クロムウェル』5幕の執筆にかかったのは1826年の8月6日。ほぼ2週間あまりで一幕を書き終えて、2幕目が終わったのが9月20日、3幕が10月9日と順調にペンを進めたが、4幕目に入ったところで、主演のクロムウェルを演じてもらうはずの名優タルマが10月19日に亡くなるという思いがけない事件が起こる。やがてユゴーは気を取り直して執筆を再開。4幕を10月25日に完成して5幕に入るが、この最後の幕にはかなり時間がかかり、完成したのは翌年1827年の9月になっていた。つまりほぼ一年を要したことになる。もってその意気込みと執筆の質を窺うことができよう。「序文」はその後9月30日にほぼ一日を費やして書き終えたようだ。10月の終わりに「注の注」を書き終えて、12月5日アンブロワーズ・デュボン社から出版されたのは先述のとおり。その間、新しく居を構えたノートル＝ダム＝デ＝シャンの自宅に何度も友人を招いて、彼らの前で朗読したことが知られている。友人たちはいよいよ新しい演劇理論による天才ユゴーの作品が世に問われるとして喜び絶賛した。それらの評判は刊本として世に出る際の毀誉褒貶に貢献することになるだろうが、実際の上演には結びつかなかった。第一上演するにはあまりに長大に過ぎた。すでにタルマの死で上演はあきらめたユゴーだが、その文学上の主張を例外的な規模を持つ序文に叩きつけることになる。

2. 『クロムウェル』の「序文」

「序文」はふつう作品の由来や執筆の動機から語るものが多いが、ユゴーはまずゆうゆうと序文の役割を数頁を費やして論じた後、以下の文章は現在の「聖なる文学的ドクトリン」のチャンピオンたちが著者に投げつけた挑戦に対する「古典主義者のゴリアーテたちの頭に投げつけようという石」という。彼は人類の歴史の中に文学を位置付け、原始の時代の「抒情詩」、古代世界となつての「叙事詩」、それが宗教と王権が並立してメランコリーと瞑想を主とするようになる「史詩」が出現するのだ。そして今やヨーロッパの全土が大転換を遂げて、かつての美に醜が、いびつな形が優美なもの、グロテスクが崇高と並

んで取り扱われることとなる時代となったと宣言する。すなわち「ロマン主義文学」と「古典主義文学」との決定的な相違である。ユゴーの「序文」の特徴はグロテスクの主張に尽きる、とアニー・ユベルスフェルトが断じたように、ユゴーはグロテスクこそ古典文学、ひいては古典主義者たちのまったく知らなかった芸術の源泉として、古代の悲劇作家からシェークスピア、ミルトンまでの文学の例や、彫刻、絵画の例をあげながら、「崇高」と対峙するグロテスクの例を細かくあげていく。彼がそれらの範をシェークスピアに取るのはラシーヌを最高位に置く古典主義者たちへの明らかな示威にほかならない。

すなわち抒情詩から叙事詩、史詩とたどってきた芸術の道は、今や近代の文学の頂上に達し、それはシェークスピアが切り開いたドラマ、すなわち滑稽と崇高が同時に融合された芸術としての戯曲において詩人の能力を発揮せしめる。こうしてユゴーがこの「序文」において戯曲の価値を抒情詩や叙事詩（あるいは歴史小説もこの範囲に入るだろう。）の歴史を縷々述べたあとに、もっとも高く称揚し、強調するのは、先にも述べたとおり、戯曲というジャンルが当時の文壇の地位を定めるもっとも大きなものであり、かつユゴーの野心が文壇の制覇にある以上、初めて世に問うべき自らの戯曲の価値をも必然的に高めることにもあったに違いない。

ユゴーはこうして詩歌芸術を歴史的に鳥瞰して、いよいよ古典主義者たちの拠る十七世紀古典主義理論に則った「三一致の法則（或いは三単一の法則）」、すなわち舞台上で展開する劇世界は、一日を超えてはならず（24時間以内に、とも太陽が昇って没するまでの間ともいう）、舞台となる場所は、一箇所に限定、主たる劇行為（いわゆる筋書き）もまた単一で、他の副次的行為（脇道にそれる筋立て）もすべて主筋に従属すべきとする規則を俎上に載せ、いわゆる「劇行為の一致」は当然の真理で根拠あるものとしてこれを論ぜず、他の2規則を徹底して糾弾する。単にありきたりの宮殿や列柱の中で人間のドラマは進行するだろうか。決められた時間の中に押し込まれた人間の行動があるだろうか。「すべての行為は、それに固有の場所があるのと同じように、その行為に適切な時間がある」。かれは古典主義者たちが引くコルネイユやラシーヌらの例を引きながら、いかにそうした規則に引きずられることが「自然」の理に背いているかを滔々と述べ、最後にオリヴァー・クロムウェルを劇の主題とした理由を述べて、そこにナポレオンになれなかった英国護国卿のドラマの意義を明らかにする。そして登場人物も多く、7500行を超え、大スペクタクルとなるこの劇については、おそらくは旧来のフランスの劇場の慣習では不可能であろうことを予測し、意識の改革によって将来ありうべきことを予言、あるいは懲憑して、自らの劇の革新的であることを強調して終わっている。

3. 戯曲『クロムウェル』

ではその劇はどんな構造になっているのか。この「ドラマ」は通常の悲劇同様5幕から

なり、第一幕「謀反の徒」は1657年、清教徒革命が成って、そののちの混乱を押し鎮めて、英国第一の権力者となったクロムウェルがいよいよ「英国王」の宣言を受けようとするその前夜のロンドンの旅籠屋兼料理屋が舞台。クロムウェルを暗殺しようとする王党派の首領オーモンド伯爵が、かつての親友で今はクロムウェルの側に立つブロッグヒル枢密院議員を呼び寄せて、一味に加担することを要請する場面から始まる。彼は加担を拒絶し退場、代わって一味の者たちが続々と集まってくる。中にもことであろうにクロムウェルの娘に恋する詩人気取りのロチェスター伯爵、クロムウェルの身边につかえながら王党派のスパイとなっている詩人ダヴナント。彼はロチェスターを牧師と偽ってクロムウェルの元へやろうとする。一方清教徒軍の大立者、ランバート卿は王党派の陰謀と結託してクロムウェルを倒し、自らが王位に昇ろうという野心を秘める。そうした集まりにクロムウェルの息子リチャードも加わり、不穏な空気のまま一幕が下りる。

第二幕「スパイたち」は王宮、饗応の間が舞台。各国大使が王冠を戴くことになるクロムウェルに敬意を表するが、表向きそれを辞退するよう見えながらクロムウェルは満更でない。しかし彼の妻や娘たちは危惧するばかり。ユダヤ人の金貸しや、陰謀の群れにいた清教徒の一人カールから彼を倒そうとする計画、さらに息子が一味にあることを知らされて、さらに王党派の叛徒のひとりウィリスも彼に謀反の詳細を密告する。ロチェスターはまんまと清教徒の牧師になりすまして、クロムウェルに信頼を得ることになり、波乱含みで第二幕は終わる。第三幕「道化役者たち」は、それこそユゴーの言うグロテスク、滑稽の極が示される。大詩人ミルトンも登場して、詩人気取りのロチェスターの詩篇など見向きもしない。クロムウェルを取りまく廷臣たちの彼の戴冠をめぐる思惑の中で、護国卿の彼はいよいよその意思を固めていく。折しも登場した彼の娘に恋するロチェスターが、娘に付き添うガグリゴイ夫人との滑稽な取り違えのラブシーンは、また作者のグロテスクの発露でもあろうか。この幕にはスパイ詩人ダヴナントも登場し、暗殺の構図がいよいよ複雑になり、同時にそうした姦計がさまざまな滑稽な仕掛けの中に炙りだされてくる仕掛けになって、この長丁場の三幕に変化を持たせている。

第4幕「歩哨」は、陰謀の標的クロムウェルが一步哨に変装して王宮の門の一つに立ち、叛徒たちをわざと通しながら、一同が集まった時点で彼らの裏をかく誠にドラマティックな展開を見せる。当のクロムウェルがいるとも知らず暗殺を企てる王党派やそれに乗るユダヤ人マナセ。息子リチャードも居合わせる中、クロムウェルは、王党派の叛徒の陰謀の一つ一つを暴き、彼らを厳罰に処して自分が王位につくことを決心してウェストミンスター寺院での式典を急がせる。第5幕「職人たち」はクロムウェル戴冠が行われるべきウェストミンスターの広間が舞台。彼の暗殺を企てて自らが王に昇ろうとする清教徒軍のランバートは、その企みを同志に知られ、窮地に陥る。いよいよ王冠が渡されんとする時、クロムウェルはランバートたちの暗殺の剣から逃れて、自分でも思いもかけぬ演説を行う。

すなわち護国卿のままに終わるつもりであることを宣言し、群衆の喝采を受ける。かれは反乱の王党派貴族を赦し、息子も許す。すべてが終わったあと、ユゴーはクロムウェルに夢見るとき様子でこう呟かせて劇を終える。「では何時、私は王になるのだろうか？」

4. 邦訳『ユゴー全集』

長大な劇を要約するのは、まことに野暮で愚かしい所業と、こう書きながら思わざるを得ないけれど、この簡単な粗筋からも（といっても小説でも、劇でも粗筋で判断するのはまことに危険極まりない）、ルイ16世の死後空席となっていたフランス王位に代わって、新しく皇帝として君臨することになるナポレオンが総裁政府のあと、執政政府の統領となり、さて国民の意思と称して皇帝に駆け昇る道と、17世紀英国王チャールズ一世を死に至らしめて国権の全部を握ったクロムウェルのそれに重ならせていたことは確かだろう。

ナポレオンが1821年にセント・ヘレナ島で死に、民衆詩人ベランジェなどがナポレオンをそれとなく称える詩編を、ナポレオン色の払拭に努めた当時の復古王政に抗して発表して、ナポレオンの陰が再びフランスに忍びよつつある時期に、この戯曲は執筆された。1830年、ルイ・フィリップを「フランス国民の王」とする7月立憲王政体制になって、以後禁忌であったナポレオンについての言説が賑わうことになる。ある意味では王位につこうとしながら、ついに就かなかった、あるいは就くことが出来なかったクロムウェルを描くところに、ユゴーのナポレオンに対する考えを見ることが出来るかも知れない。同じ頃、2歳年上のバルザックや1歳年下のメリメが、同じクロムウェルを題材に戯曲制作をしていることを思うと、いっそう当時フランスにおけるクロムウェルの位置が見えてくる。他のロマン主義の青年(功成らずして、作品も名前ものこっていないものたち)の作品にも、どれだけクロムウェルが扱われたことだろう。

それとは別に、ロチェスター伯のへぼ詩のクロムウェルを前にしての売り込みなど、ユゴー周辺(あるいはユゴー自身を含めた)の詩人のカリカチュアとして見ることもできよう。ユゴーとナポレオンの関係は前号の記事に少し触れておいた。さらに詳しくこの戯曲について分析するのはこの連載の趣旨ではないので、以上の粗雑な紹介のみに留めておくことにしよう。

ただもともとの趣旨である神戸女学院架蔵書目の紹介として、大正8年から9年にかけて冬夏社から全12巻の『ユゴー全集』が刊行されて(さらに全13巻として同じ書店から大正9年から10年にかけて出る)、その復刻版が全6巻として本の友社から出たものがあることを付け加えておこう。元版の訳は川路柳虹、福士幸次郎、柳田泉、中村星湖など早稲田派の文人たちが多く名を連ねるが、また後藤末雄などの赤門派も名を連ねている。まだ大学に仏文学科ができるか、できないかの時分だから、おそらくは英訳の原本によったものか。本の友社の復刻版の解説にも元版について詳しい書誌的事実が語られず、元版においても訳者名はきちんとあるが、拠った版本や解説が誰の筆になるものか、一切の情

報がない。

これについては私自身も少し興味を持つことになって（これはこの原稿を書くにあたって、馬場さんに大正時代の全集があるかと問うたところ、復刻版があることを知らせていただいたことによる）。訳文は『クロムウェル』の柳田泉のを見てみたが、世にいうところのそれほどひどい訳文ではない。もちろんいろいろ誤りがあるのは致し方ないが、フランス語も多少は覗いてみた気配もあるし、今と違ってさまざまな制約のある折から、こうした大作を日本語に移し替えた努力は多とすべきだろう。復刻版はいささか準備が周到でなくて、版型も二段組みの B4 判。愛蔵するにはややためらわれるものながら、現在のところユゴーの諸作品をとにかくも読めるという点で貴重である。もっとも間違った訳で読むよりは、結局は辞書を引き引き、たどたどしくも原作を読む方が、はるかに害が少ないことは言うまでもない。

付記 以上の稿を書いた後で、この邦訳『ユゴー全集』について、あるいは早稲田派の文人たちの共同作業であろうかと思って、友人の早稲田大学比較文学主任教授小林茂氏に教示を乞うたところ、以下のような詳細な情報を寄せてくださった。以下に抄録して感謝の意に変えるが、鷲尾雨工を「編集の言葉」の書き手と推されるところなど、極めて興深く、私も大いに研究心をそそられるが、まずは小林先生の見解を紹介して、今のところ責を果たしたい。

以下は小林茂早稲田大学教授の教示をそのまま録したもの。

大正 8 年 6 月から刊行開始された「ユゴー全集刊行会編輯」による「ユゴー全集」の内容などを以下に記録しておく。

ユゴー全集 第 1 巻 大正 8 年 6 月 28 日発行

マリー・チュードル(平林初之輔訳)、マリヨン・ドロルム(神津道一訳)、トルクマダ(広瀬哲士訳)、アルナニ(柳沢健訳)、ふたご(宮原晃一郎訳)、クロムウエル(柳田泉訳)

ユゴー全集 第 2 巻 大正 8 年 8 月 28 日発行

緒言〔未完〕

アンゼロ(岡村千秋訳)、アミー・ロブザアト(前田晃訳)、自由劇：祖母、森はづれ、彼らは食ふか、剣、愛さるるもの、護符、雨後の森、乞食(川路柳虹訳)、ルクレッツア・ボルチア(福士幸次郎訳)、ルイブラス(中村星湖訳)、王者の悦楽(早川善吉訳)、城(福士幸次郎訳)

ユゴー全集 第 3 巻 大正 8 年 9 月 22 日発行

緒言〔完〕

ヴォルテールを論ず、ウオーター・スコットを論ず、アバー・ド・ラムネーを論ず、バイロン卿を論ず、偶感、歴史断片、ドヴァール氏を論ず、記念物破壊者を責む(平林初之輔訳)、イムバール・ガロワ(本多平八郎訳)、シエクスピーヤ(本間武彦訳)

ユーゴー全集 第4巻 大正9年4月15日発行

追放〔前、中〕(神津道一訳)

ユーゴー全集 第5巻 大正9年8月10日発行

追放〔以後〕(神津道一訳)、小人ナポレオン(本間武彦訳)

ユーゴー全集 第6巻 大正8年12月28日発行

随見録(本間武彦訳)、罪の歴史(小野浩訳)

ユーゴー全集 第7巻 大正9年5月15日発行

東方の詩、黄昏の歌(小野浩訳)、内部の声(川路柳虹)、光と暗(小野浩訳)、瞑想(川路柳虹訳)、世紀の伝説(福士幸次郎訳)、街と森の歌(小野浩訳)

ユーゴー全集 第8巻 大正8年11月30日発行

レ・ミゼラブル 1-3部(宮原晃一郎訳)

ユーゴー全集 第9巻 大正9年2月28日発行

レ・ミゼラブル 4-5部(宮原晃一郎訳)

ユーゴー全集 第10巻 大正9年3月28日発行

バク・チャルガル(早川善吉訳)、九十三年(宮原晃一郎訳)、氷島のハン(早川善吉訳)

ユーゴー全集 第11巻 大正8年10月31日発行〔ただしこの巻奥付には、第4巻と誤記されている。このことは、当該の巻が第4回配本に当たることと関係があるのであろう〕

笑ふ人(宮原晃一郎訳)、死刑囚最後の日(後藤末雄訳)、クロード・ギュー(丸山芳吾訳)

奥付の発行日によって知られるとおり、刊行は巻数順に行なわれてはいない。刊行の順は：第1巻(大正8年6月28日発行)；第2巻(大正8年8月28日発行)；第3巻(大正8年9月22日発行)；第11巻(大正8年10月31日発行)；第8巻(大正8年11月30日発行)；第6巻(大正8年12月28日発行)；第9巻(大正9年2月28日発行)；第10巻(大正9年3月28日発行)；第4巻(大正9年4月15日発行)；第7巻(大正9年5月15日発行)；第5巻(大正9年8月10日発行)となる。

各巻とも、冒頭に解題(無署名)を置く(第8巻のみは、原著の前文を巻頭に置く)。

2巻および3巻は、解題について無署名の「緒言」をおく。これを本の友社は復刻の際に「解題」として収録している。ただし、これはこの第1次刊行に続いて直ちに行なわれたとおぼしい第2次刊行において、「解題」と改称されている可能性がある。

各巻とも奥付には、非売品とある。予約頒布の形式をとったのであろう。

刊行は：株式会社冬夏社内 ユーゴー全集刊行会として、麹町区三番町二八番地と冬夏社の住所がある。

刊行会代表は、鷺尾浩(1892 - 1951)である。鷺尾浩すなわち雨工であって、冬夏社は鷺尾が設立した出版社である。

鷺尾は明治25年(1892)小千谷の出身(中学で西脇順三郎の1年先輩に当たる)。明治44年(1911年)早稲田大学英文科予科に入学、大正4年(1915)に本科を卒業し

ているが、それに先立つ大正 3 年（1914）に、ダンヌンチオ作『フランチェスカ』を翻訳、新陽堂から出版刊行していた。冬夏社は、大正 7 年、植村宗一（直木三十五）とともに創立した出版社春秋社から大正 8 年に独立する形で鷺尾が創立した出版社である。冬夏社は『ユーゴー全集』完結の後に、大正 9 年から 11 年にかけて鷺尾個人訳による『マーテルリンク全集』8 巻〔第 8 巻はマーテルリンク評伝の翻訳 2 篇に吉江孤雁の評論「マーテルリンクの思想芸術の解説」を収録〕、『ドストイェーフスキー全集』15 巻〔植村宗一は第 5・6 巻の『憑かれた人々』ほかを翻訳〕を刊行しているが、その後ほどなく倒産したもののようである。

『ユーゴー全集』は多彩な訳者を動員しながら、鷺尾自身は参加していないのだが、無署名の「緒言」は、これも無署名の各巻収録作品の解題とともに、鷺尾の筆によるものである可能性はないだろうか。

以上が小林茂教授の教示されるところだが、この邦訳全集をみても、内容の立ち上がった評価はともかく、ほぼユーゴーの著作の主立ったものを取り上げており、ユーゴーの全貌を窺うよすがが、大正デモクラシーの流れの中で(ユーゴーはパリコンミュン後のパリに熱烈に共和主義者として迎えられた)あったことを示していて興味深い。やや古風な訳文ながら、原文片手にそれらを検討してみようと思う学生の方々がでてこられれば、復刻者の意図も報われるだろう。

<視聴覚センターからのお知らせ及び近況報告>

川野 福恵 視聴覚センター職員

1.AV ライブラリー特別貸出について

夏期休業に合わせて、語学ソフトの特別貸出を実施します。実施期間や冊数等、詳細については、AV ライブラリーの WEB ページや掲示にてお知らせいたしますので、ご利用ください。

2.語学ソフト・新着ソフトのご案内

AV ライブラリーでリクエストの多かったものを中心に選定し、「レッドクリフ Part1」

や宝塚歌劇団「薔薇の封印」「エリザベート」、「善き人のためのソナタ」など多数入荷しました。また、中国語検定やハングル能力検定試験等の語学ソフトも宮田先生が選書くださいましたので、ご活用ください。

3. 第2回映画上映会の報告

2009年5月26、28、29日の3日間、エミリー・ブラウン記念館めじらウンジにて第2回映画上映会を開催しました。今回も学生スタッフKCUの協力を得て、宮崎あおい主演「初恋」を上映しました。

第1回目の上映会の反省をもとに開催場所を検討し、多くの皆さんに見ていただけるよう、大型スクリーンとプロジェクタを準備し、開催しました。時間帯や場所の便利さもあり、3日間で延べ86名中28名の方が最後まで視聴してくださいました。

今後もエミリー・ブラウン記念館めじらウンジを開催場所として、気軽に上映会に参加していただけるよう、また学習のきっかけを作れるような作品を上映していきたいと思えます。